白粉刷毛

化粧に刷毛がつかわれるようになつたのは、白粉、ほほべに、まゆずみなどの化粧品をもちいるようになつた時からであろうと思われる。

いつの時代でも、どこの国でも、常に美しくありたいと願う女性の心に変りわない。

五千年も前のエジプトのアハホテプ王妃はすりつぶした孔雀石の粉を顔に塗つて化粧したとつたえられている。

白粉を顔に塗つて、より白く美しく見せるという化粧法は、支那には太古すでに発達して居つた化粧法だといわれている。

周の時代（約三千年前）の文王の頃、女人ははじめてこれをつくつたといわれているが「事物起源考」によるとそれより前、殷の紂王の時代につくられたとある。

殷の紂王は夏の桀王とともに古代中国における暴君淫主の典型で、人並すぐれた才智武勇の持主であつたにもかかわらず、有蘇氏の国から献上された世にも稀なる美貌と淫奔さを併せ備えた妲己に魂を魅せられこの女性のあくことを知らぬ欲望を満足させるため、莫大な物資と人力を消耗して玉をちりばめた豪壮な宮殿園池が造営され、底に真白な砂利をしきつめた。その池には酒を満たし酒糟を丘とし、肉を吊りさげて林になぞらえ、楽師に命じ新しく作らせた北里の舞、靡々の楽など、身も魂もとろけさすような淫らな音楽のしらべにあわせ、国中からかり集めた三千人の美女を舞わせ、一糸まとわぬ男女の一隊がそのあたりをおどり狂い、それを観る人々は忘我の恍惚境にひたりながら池の酒をがぶ飲みし、林の肉をむさぼり食う、全くの「酒池肉林」、その狂態をうちみやりながら、しどけなく紂王の膝にしなだれかかつた妲己の頬にもやがて淫らな満足のほほえみが浮ぶ。こ

のような狂宴は、百二十日もの間、昼夜を分たず繰りかえされ、これを「長夜の飲」と呼びならわしたといわれる。

かくて暴君淫主の名をほしいままにした紂王も、湯王を始祖として六百余年、二十八代目に、周の武王の革命の前にあえなく亡びるのであるが、この常軌を逸する奢侈淫逸を事とした狂態のこの時代に白粉が用いられたとの説も、もつともと推考される。これはわが国の穴居時代の頃であろう。

白楽天の傑作と称せられ、楊貴妃の一生を叙して、玄宗帝別離の恨を述べた〃長恨歌〃の一節に

回眸一笑百媚生　　ひとみをめぐらして、いつしようすれば、ひやくびしようず
六宮粉黛無顏色　　りくきうのふんたい、がんしよくなし

とあり、また

後宮佳麗三千人　　こうきゆうかれいさんぜんにん
三千寵愛在一身　　さんぜんのちようあい、いつしんにあり
金屋粧成嬌侍夜　　きんおくよそほひなつて、きようとしてよるにじし

ともあつて、長安に都しその治世の前半をよく治めて名君とたたえられた唐六世の天子玄宗皇帝は寵妃武恵妃をうしない、じぶんの子寿王の妃であつた楊貴妃を見そめ、寿王から楊貴妃をひきはなし（ものいう花）にたとえて、これを己れの後宮にいれてからは政治をわすれ楊貴妃のためのみの奢侈逸楽がはじまり、後には安禄山の反乱となり、更には楊貴妃が殺される悲劇となるのであるが、このころこの大奥の官女達が白粉を用いて美しく化粧していたさまが白楽天の長恨歌によつて知られる。

中国でつかわれていた白粉が日本には朝鮮を経て大和時代（日本武尊）の頃に渡つて来たものであるといわ

れ、また神功皇后の頃ともいわれているが、神功皇后以前にも大陸との接渉はあつたのであるが神功皇后は新羅を屈服させ、彼国の王子を人質とし、金銀綾羅八十船を献させ、爾来八十船を以て歳貢の額と定められたが、この遠征後、彼の国人の帰化するもの多く、これら帰化人が諸種の技工を我国に輸入した。応神天皇の十四年の二月百済より縫衣工女を貢し、秦の始皇帝の後裔の弓月君は百済より百二十七県の人民をひきいて帰化したといわれ、これが秦氏である。二十年九月には後漢霊帝の後裔という阿知使主及びその子都加使主は十七県の民をひきいて来朝帰化したといわれ、奈良時代の貴族は熱心に中国文化をとり入れるため努力し、大宝二年から宝亀八年迄（七十五年間）に六回にわたり遣唐使が派遣され、その船隊はたいてい四隻で乗員は四、五百人に達し困難な航海をものともせず学問、技術、文芸、音楽、仏教、建築、彫刻、絵画、服装等から生活様式までも学んだ。両国の往来が頻繁となり、大陸の文物を我国に輸入し、百般の文物俄かにその面目を改むるにいたつたといわれるので、婦人の化粧料である白粉も、もうこのころは輸入されておつたものであろうと思われる。

「日本書記」の雄略天皇のくだりに

天下麗人、莫若吾婦、茂矣、綽矣
諸好備矣、曄矣、温温、種相足矣
鉛花弗御、蘭沢無加

とあり、この頃（二十一代雄略天皇、約千五百年前）既に特権階級は白粉も香油ももちいて化粧しておつた事がしられる。

朱鳥六年五月、四十一代持統天皇（約千二百五十五年前）の時、僧観成がはじめてわが国で白粉を作つたと伝え

られているのでそれ以前のものは輸入品であつたろうと推定される。

（故事成語）に

白粉は支那にても古昔米屑末を用ひ、鉛を焼きて

これを製するは後世の事に属す。

とある。

はじめは糯粉製の白粉で（しろきもの）と言われて居つたようで

「枕草子」に

・・・・・舎人の顔のきぬもあらはれ、まことに黒きに白きもの行きつかぬところは、雪のむらむら消え残りたるここちしていと見苦しく、・・・・

とあり、また

さるけしきもこそは見ゆらめ、とく立ち給はなんと思へど、扇を手まさぐりにして「絵のこと、誰が書かせたるぞ」などのたまひて、とみにも賜はねば、袖をおしあてうつぶしたるも、唐衣に、白いものうつりて、まだらにならむかし。

とあつて白粉をしろきものとよんでおり、また（はふに）とも言われたようである。

「栄華物語」（藤原時代、約九百年前）の裳着巻に、

怪しき様したる女ども黒掻練きせて（はふに）というものを塗りつけて、かづらせさせてむら刷毛化粧して

・・・

とあるところから想像して白粉刷毛のつかわれておつた事も察せられるとともに、白粉刷毛の呼名を（むら刷毛）とは、もつとも適当な名称であるとも思われる。

糯粉製であつた白粉が、のちに鉛を主剤としたものが民間で用いられ、上流社会では水銀からつくつたものが（はらや）という名で愛用された。

はじめの頃は御所白粉といわれたように、宮中と宮中の女官達が用い平安朝の末頃には、公卿達も顔に塗るようになつた。伊豆に流されていた源頼朝が、治承四年鎌倉に平氏追討の旗を挙げ、奥州にあつた弟義経が馳せさんじ、遠く都に攻め上り、これに前後して同年九月頼朝のいとこの木曾義仲が信濃に兵をおこし越後に攻め入り、進んで越前の平通盛をやぶり越前、越中の土豪はことごとく義仲のもとにあつまり、日に日にその勢いがさかんになつてきた。

これをむかえ討たんとする平家の公達は、ながい間むさぼつていた都での栄華の夢さめやらず、この火急の場合にも歯を染め、白粉、まゆずみで化粧して出陣したといわれており

琴うた（須磨の嵐）にも

・・・・・見れば二八の御顔に花を粧う薄化粧・・・・・・

とうたわれており、平家物語の一の谷にて修理大夫経盛の子息、大夫敦盛を、熊谷の次郎直実がうつくだりに

取つて押さへて首をかかんと内甲（うちかぶと）を押しあふけて見ければ、年の齢（よわい）十六、七ばかんなるが、薄化粧して鉄漿（かねぐろ）黒なり、わが子の小次郎が齢ほどにて、容顔まことに美麗なりければ、いづくに刀を立つべしとも覚えず・・・

とある。

支那に

（伝粉郎）「白粉をつけた男」

として伝えられているが、これは白粉をつけたのでなく黄色人種の中には珍らしい色白の男のおつたものであろうか

（魚豢略）に

何晏字は平叔、姿儀に美なり、面絶だ白し、魏の文帝其の粉を伝くるかを疑ふ、後、夏月に至り喚び来り、熱湯餅を与ふ、大に汗出ず、遂に朱衣を以て自ら拭ふ、色転た皎然たり、帝始めて之を信ず、

とある。

白粉が戦国時代に明から輸入され、舶来品としてもてはやされたので、今も昔も変りなく早速その模造品がつくられ、堺の津の銭屋宗安の銭屋白粉や、小西家の小西白粉が売り出されたが、白粉ばかりでなく頬紅も古くから唐より輸入され、奈良朝時代もつとも盛んに用いられたので、（正倉院鳥毛立女屏風）などをみれば奈良朝時代の女性が頬紅をいかにつけていたかが明白である。

縄文土器の出土品の中に婦人の顔が作られているのがあるが、その頬に酸化鉄でベニガラを作つて頬に塗つたものがあるところからみると穴居生活の縄文時代すでに頬紅の化粧をしていたのではないかとも考へられる。

わが国六十代醍醐天皇の代に左大臣藤原時平のざん言により、右大臣を免ぜられ太宰権師として筑紫に流された菅原道真は延喜三年二月二十五日、今から千六十年前五十九才で太宰府に没した。太宰府は千三百年の昔、天

智天皇の時、朝鮮の客をもてなす為の迎賓館をつくり、これを守るため万葉の昔から、防人（さきもり）を全国から集めた事は歴史が伝えているが、道真がこの太宰府に天満宮と祀られている事はあまねく人の知るところ。この道真公が五才の時に作つた歌に

美しや紅の色なる梅の花
あこが顔にもつけたくぞある

とあり、阿呼（あこ）とは道真の幼名で、この時が五十四代仁明天皇の喜祥三年の事で、当時頬紅をつけていた事をこの歌によつても知る事が出来る。またまゆずみは支那の唐代に流行し奈良朝時代に遣唐使や唐からの帰化人が国内にもたらしたもので、この頃は眉に墨を塗つていたが、平安朝延喜（約千二十年前）頃は眉の毛を抜いてへらで眉墨をえがいた。これは主として女性のことであるが、男子は平安朝末期、七十二代白河上皇（約八百七十年前）の頃から女子に倣つて作眉の風が、公卿の公達の間に生じ、鎌倉時代になつて武家遊女や白拍子なども、つくり眉をしだし、江戸時代には一般民間の婦女子もこれをやるようになつた、といわれている。

眉筆については熊野速玉神社所蔵の橘蒔絵手箱（博物館）の内容品の中に眉筆や歯黒筆があり、これがシマ毛（馬の胴毛）で作られており室町時代のものである。

（故事成語）に

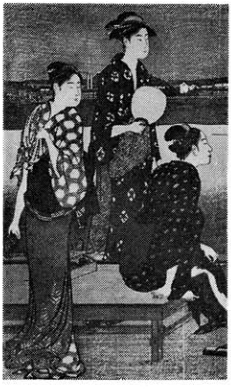
（画眉（くわび））支那人眉を削り更に縁黛を以て仮眉を画く、その巧拙によりて顔容を改め妍醜をなす、柳眉、蛾眉、遠山眉あり

とあり

眉をそる（菅原伝授手習鑑）

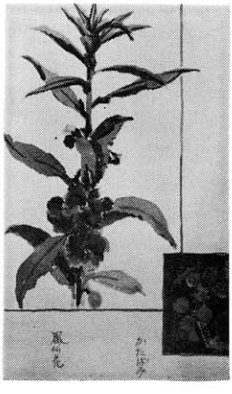
白粉刷毛（歌川国貞作錦絵）

青楼芸者選いつとみ
重文・鳥文斎栄之画



大川端夕涼美人
重文・鳥居清長画

紅　花



昔のマニキュア材料
かたばみと鳳仙花

（古事記）応神天皇の段に

（麻用賀岐許邇加岐多礼）

とあり土をもつて眉をかいた事がみえ

（万葉集）に

眉根削　鼻鳴紐解　待哉　何時見　念　吾君

とある。後世婦人が人妻となれば眉をそり落す風習が行われ、明治末期頃にいたつても一部にこの風習が残つておつて

眉毛おとして丸まげ結つて・・・・

などと歌にまで歌われたものである。

古川柳に

げんぷくも二タ剃刀は女なり

花嫁を二タ剃刀でらりにする（らりはかたなしの意）

片まゆ毛おとすと嫁は手でふさぎ

と眉毛おろしをよんでいる。

式亭三馬の浮世床に

「もう三十七八になるだろうがまだ眉毛をくつ付けてるナ、女が好いの美しいの沈魚落雁閉月羞花でも、眉毛を落す時分に落さねへ奴だから支離だ、本の事よ、化物の仲間だ、人間の交りぢやねへ」

とある。

眉を抜いて鉄漿をつけるのが中古の風習であつて眉を抜かずにそのままにしている女を、眉刀自女といい、眉潰（まゆつぶし）の言葉もあり、これは堅いびんつけ油と砥の粉とを交ぜてつくり俳優の眉を塗り隠すに用いる。

明治の初期に処女が眉毛をすり落して歯を染めるというさわぎのおきた事がある。安政元年ペリーが二度目に日本にきたとき徳川将軍へもつて来たおみやげの中に後の「針金だより」すなわち電信機があつた。電信は明治二年に東京、横浜間に、明治三年に大阪、神戸間が開通、「伝信機は幾百里へだたる場所も人馬の労をはぶき、線の達する場所までは音信を一瞬に通達する至妙の機関なり」とその効用を宣伝した。中部地方では電信はキリシタンの魔法で電線に処女の生き血を塗るから娘をつかまえにくるという噂がたち、娘たちは眉毛をおとし、歯を染めて、処女でないという形をつくり出す娘が続出したという、今にすれば笑い話として残つている。

眉につばをつけるというは、狐、狸が人をばかすには、先づ眉毛を数えてかかる。眉につばをつければ数えられる事なく、ばかされる事がないとの古の諺により、他人にあざむかれぬよう、用心するという場合、眉つばの言葉がつかわれる。

清元、六歌仙容彩、喜撰法師の一節に

彼奴にうつかり眉毛を読まれ

とある。

長唄「京鹿子娘道成寺」に

たれに見しよとて紅かねつけよぞ

とあるが、奈良朝以前から日本女性は十歳頃から歯を黒く「かね」でそめていたのであつて、その起源は、古代人の住んでいた頃の日本は熱帯植物が繁茂していて、その樹実を食すると歯が黒くそまりその黒さを以て女性美の一要素としていたので、熱帯植物がなくなり、それを常食としなくなつてからも、歯を黒くする風習が残つたものといわれている。

歯を黒く染める事は室町時代に髯の流行とともに貴族、武士など男も之れを行つたほど流行したのであるが、歯を黒く染めるには時間と金がかかるため、これを行うものも上流婦人や遊女達が多く一般民間人が歯を染め始めたのは江戸時代になつてからの事である。

鉄漿（おはぐろ）は五倍子蜂が白膠の木に作つた巣をつぶし、その茶色の粉末に鉄汁を加えた黒汁で歯を染める。これにより口元が柔かく見え、歯のぬけることを防ぐという効果もあると考へられていた。

また爪を紅く着色する事は元禄時代（約二百五十年前）頃から行われていた。しかし爪専用の紅はなかつたので凰仙花と酢漿草（かたばみ）の葉をもみ合せて、染めたり、普通の紅粉を塗つたりした。

元禄時代のおしやれな女は、まず足指をきれいに見せる事を誇つたので、足の爪に多くつけ、ついで手指の爪につけたのである。

爪を切つた跡のはだえをかくすのが当時の女の身だしなみの一つであつたという。

足の爪を紅で染める事で江戸時代の辰巳芸者について

寒中にも足袋をはかず、足の爪を紅で染めて、羽織を着用して意気と張りとで売り出した

深川芸者

など書かれており、小唄にも

巽(たつみ)やよいとこ素足(すあし)があるく羽織やお江戸の
ほこりもの八幡鐘が鳴るわいな

とある。

深川は江戸の中心から巽(たつみ)にあたるので辰己といい、そこの芸者を辰己芸者といつて吉原の濃艶なのに対してここは清妍な町風があり徳川時代の文化文政のころは吉原遊廓をしのぐほど江戸第一の花柳界として繁昌したものであるというが、深川では芸者のことを羽織といい、芸を磨き、いきとはりとの生粋は江戸の遊客と意気の通ずるところもあつたという。

今日でも端歌に「深川」の題で

ちよきで行くのは深川がよい・・・・・・

と酔客のたつみがよいが唄われている。

その頃足の爪に紅を塗るのは深川芸者の専売であつた。それは田舎の百姓娘が多かつた吉原の遊女にくらべ都会そだちであつたので（男つぽい）（おきやん）だつたので思いきつた事も出来たのだという。深川に寛永元年に富岡八幡が祀られ、この八幡宮前の茶屋が始まりでそして芸者の元祖で江戸ツ子気質を看板に張りと意気地の辰己芸者として売出したが、天保の改革で厳重な取締りにあい、少しづつ取締りの届かない柳橋にうつり隅田川筋で芸者といえば柳橋芸者ということになつてしまつた。

江戸時代、喜多川歌麿などの浮世絵の裾の乱れの露出的影響により女が足に白粉を塗るようになつた。

女の腰巻はもと（脚布、二布、湯巻、湯具、湯文字）などといつて一般には江戸時代の初めごろから用いられたといわれ、勿論下肢を包む肌着で人前に出すべきものではないが、江戸の露出趣味は、まづこの腰の肌着の腰巻をちらつかせて人目をひく事に始まつた。これは幕府の奢侈禁止令により華美な染織工芸を禁ぜられたが、町人の富裕化による生活力の向上は、御法度にふれない枠の中で衣服の裏地や下着などに贅をつくし、ついに腰巻に緋縮緬をもちいるようになつた

見ぬようにしても目に立つ緋縮緬

遊女にはじまつたこの風俗が一般の町女にひろがつたもので、だいたい女の腰巻は、入浴用の湯具として古くからあるが、これに赤色を使用する事は、赤色を魔除の色と思う信仰と、経血の擬色となるから行われたのであるが、多くは木綿、せいぜい羽二重であつたが、宝永年間頃には、もう緋縮緬になつている。

かように腰巻に華美をつくしたのは、江戸幕府の奢侈禁止令が衣服の上着に限つていたので、上着は質素に見せ、その反動で肌着に贅をつくしたのであろうが、腰巻に緋縮緬を選んだのは、露出展示の目的がひそんでいたものと解されており、宝暦年間頃は、この風俗が一般に常識となつたようで

当世いただきぬきゑもんにして、顔を他人にあらわに見せ、肌えまでを見せんとて、右手につまをとり、歩きやうまであらわにし、ひ縮緬の湯もじを自慢らしく、是見よがしにすること、甚だ以て風俗の乱るるといふべし、夫に此頃、町の女房は、紅緋縮緬は勿論、甚だしきは縫鹿の子など入れて、前にも申す通り小袖の前をほらほらさするは畢竟此ふんどしを見てくれにて候はんが、さりとてはさもしき心

底（馬場文耕下手談義）

とあり、また

女の脚布（腰巻）は穢物にて人前へ出るものにあらず、男の褌勿論なり、是れを晴とするは角力取許りなり、さるを娼婦の類は、いかめしく緋縮緬を長くして、衣服と裾とを等しうして人前へひらめかす、尾籠云ふ計りなし、責めては妓婦はゆるしてん、近き頃はなべての女かくの如し。

と大いに時代を慨嘆したのが寛政の頃という。

町の女房共は、わざと裾のひるがへるようにして、
脛の白いを見せつけ、仙人を落して見世物にせん方便と見えたり（続下手談義）

ともあり、赤い腰巻の間から、白い脛をちらつかせ、男のかんのうをゆさぶる女が、この頃少なくなかつたことが連想され、こうなれば露出される脛は色の白いことが第一条件となるので

お湯殿はももに白粉塗つて出る

と、俗つぽい仙人を落す為めに、いよいよ脛やももに肌化粧を行うようになつたものという。

歌舞伎俳優は舞台での役柄によつては、足からもものほうまで白粉を塗る

世情浮名横櫛、源治店の切られ与三郎
弁天娘女男白浪、浜松屋の場　弁天小僧菊之助

など歯ぎれのよいタンカとともに、くるりと裾をまくるところが見せ場であり、役者が足や股に白粉を塗る時は特に大きな刷毛が使われるが、十六世市村羽左衛門が足に使つた牡丹刷毛は直径四寸程であつた。

徳川時代のはじめは

御所おしろい

京おしろい

の二種であつたものが、その中頃には

生白粉

舞台白粉

唐の土

丁字香

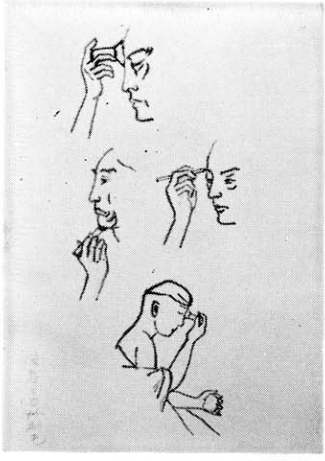
蘭の露

菊の花露

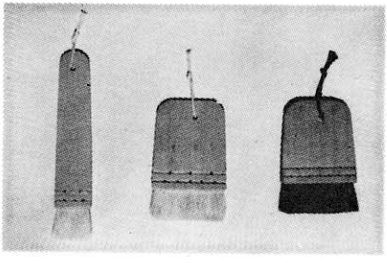
など気どつた名の白粉がたくさん現われ、これ等を使用したのは、宮中や特権階級と俳優と遊女とに限られて居つたものが、一般婦女子の間にも流行するようになり殊に南京艶白粉は当時の婦女子にもてはやされたという。

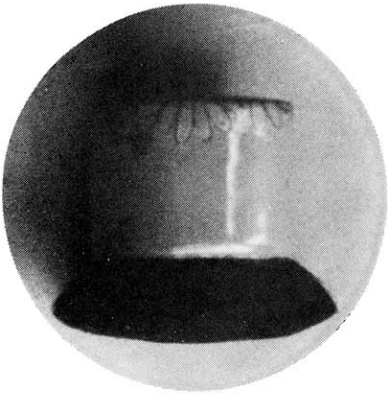
白粉にはふくよかな香りをともなうのであるが香り専門の香もつくられた。練香は嵯峨天皇の時代に、藤原冬嗣が桜花、黒方、侍従などの練香をつくつたのが始まりである、この桜花という練香は、沈香、占唐、白檀、甘松、甲香、董陸、麝香、丁字等を適量に練つてつくつたものであつて、武門に政権が移つて練香の優雅さも衰えたが、武家がだんだんぜいたくに流れるに従つて、室町時代頃から練香も復活するにいたつたとある。

化粧水は文政年代の作家、式亭三馬が日本橋本町で売薬化粧品店を営み、これが繁昌し、この店から売出した

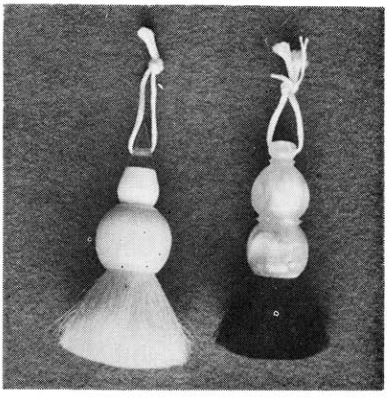


役者と白粉刷毛





白粉刷毛



白粉下（江戸の水）は評判がよく売行き頗る良好であつたといわれる。

昔の白粉には原料として鉛がいれてあり、乳児がこれを乳とともに吸い込んで脳膜炎を起す例が多かつたのであるが、明治三十年代、医師橋本綱常が西洋の法に基いて、亜鉛白粉を発明して売り出したが、明治時代有名であつた御園白粉などはその一つである。

昔の婦人は入浴時に必ず洗粉を用いたのであるが燥豆、白小豆の粉、むくろじ皮、芋柄、煙草茎、蛤粉、横柏皮、土瓜根、滑石、甘松、白附子、白芷などを配合して長崎洗粉、オランダ洗粉、蘭奢粉などと称して売出され効能は皮膚をつややかにする作用をもつている。他に糠は自製の洗粉として古くから用いられ、これは明治末期迄婦人に用いられていた。なお化粧石鹸が出来たのは横浜の堤磯右衛門によつてである。外国人の持つている石鹸を参考にしてその製造に成功したのが明治六年である。

石けんが発明されても、おしやれな婦人は澱粉などの混合物の多い石けんでは足などを洗い、顔を洗うには糠を用い、洗濯には灰汁（あく）を使つていた。

かように調べてみると、白粉を塗る時、刷毛を用いたのは白粉が日本に渡つて来た頃、すでに刷毛が用いられて居つたようで、白粉刷毛ばかりでなく頬紅刷毛、眉墨刷毛、爪紅筆なども使われておつたと考へられる。

（歌舞伎劇、お俊伝兵衛（近頃河原の達引）堀川与次郎内の場（天明五年、〃約百八十年前〃初演）でお俊が硯箱の筆がつかいものにならぬため自分が持合せた紅筆で書置きを書く場面がある。

支那では古くは丹に油を交ぜて口紅をつくつたといわれている。

丹果の唇というのは、支那から伝わつたもので、仏語であつて、仏の相好の一つで額婆果という、赤色にして

水分多き果実に似たる唇との意であるという。

紅も今は化学的に作られるが、昔は紅花から紅をとつたので、寒い地方が産地で、山形地方は紅の産地として知られていた。

この地方でつくられた紅は、船で敦賀へ更に都へ、そして京美人の口紅として愛用された。

詩人芭蕉が、尾花沢から立石寺へ行く途中で、よんだものだろうといわれる詠句に

まゆはきを俤にして紅粉の花

とあり、紅の花はその形がまゆはきに似ている、紅粉の花はまゆはきを己が顔かたちにして咲いているという意で、まゆはきとは、当時の化粧道具の一つで眉掃をいうのであつて、白粉をつけたあとで眉を払うに用いる小さな刷毛のこと。その頃（元禄二年）こんな化粧刷毛のあつた事が知られる。紅粉の花は紅黄色の薊に似た頭花状の花をつける。花弁を摘んで紅をつくり口紅や染料とする。末の方から本の方に咲くにしたがつて摘むので末摘花の別名がある。

山形地方の民謡に（紅花つみ唄）がある

千歳山からナー紅花の種蒔いたヨー

シヤン〳〵

それで山形花だらけ

サアーサツマツシヤレツマツシヤレ

紅花摘むのもそもじ（貴男）とならば

いらか（とげ）さすのもなんのその

と今に唄われている。

山形地方に名物の「のし梅」というのがあるが、これは昔、山形地方特産の紅花から紅をとるのに梅の実の酸味が必要であつたので梅が多く植えられ、この梅を利用してつくつたのが「のし梅」という菓子で、これは紅製作の副産物で、創始者はいまから二百五十年前の山形城主の御典医、小林玄端である。

明治時代になつても俳優や芸者、遊女などが兎の手（兎の足を切り爪を取つて乾燥したもの）を使つて居つた位であるから白粉が渡つて来た当時の白粉刷毛は其の他の刷毛の進歩状態と比較して歌舞伎が出来た時代のもののように進歩したものではなかつたであろうと推定される。

兎の足は今でも化粧に使われているが、これは兎の後足を使うのであつて、そのため家畜として飼われた兎は小箱の中で飼われるのでその排泄物のため足の毛の色がよごれて茶色になつている部分があるので顔におしろいをつけるために使うには工合が悪い。

そこで白粉用の兎の足は雪の降る季節の野兎の足が最もよいのであつて、この野兎からは純白な毛の足を得ることが出来るのである。特権階級は、化粧用の刷毛を時と金とに制限される事なく最優秀なものを入手しておつたもののようで、昔大名の奥方が使用したという白粉刷毛（池田宣政所蔵）は丸い筒（柄）の長さ五寸―三寸五分でこれに精密な蒔絵をほどこし、その両方に白い毛を嵌め込み、その太さも一寸位から一分位迄、各種の寸法が作られてをり、その毛がまた小筋の実に優秀な羊毛が（縞毛のものもある）使われていて実に見事なものであり、その材料の羊毛は勿論支那からの輸入品である。

尤も当時、毛が支那から輸入されて居つたのは羊毛ばかりでなく赫熊も輸入されておつたもののようで赫熊（しやぐま）を使つた古いものを見る事が出来る。

辞書に依ると（シヤグマ）といふ獣はないので一種の加工品の名称で（シヤグマ）（赤熊）（赫熊）と書くので（はぐま）の毛を染めたもの、又縮毛（ちぢれ毛）にて作つた人毛で桃われまげ等に用う）とあるがこれは明治時代（ひさしがみ）や（二〇三高地）などという髪が流行した際、人毛（ベラ）に波状の加工をほどこし、極めて大量にこの赫熊が国内で生産されたので、それを指したものと思われる。

が、はぐま（白熊）というのは白い熊の毛ではなく支那から舶来する犂牛の尾のことで

犂牛の喩えに

論語雍也第六

子謂仲弓曰犂牛之子、騂且角雖欲勿用山川其舎諸。

しちゆうきゆうをいひていわく、りきゆうのこもあかくしてかつかくならばもちうるなからんとほつすといえども、さんせんそれこれをすてん。

また摩訶僧祇律によると柄を金銀をもつて作り白聳牛の尾をたばねた払子を使用していた仏弟子のあつたことが見えている。

払子について

払塵ともいう、仏在世の時、諸比丘蚊虫のためにかまれて痒を患ふ、仏之を払ふの具とある。

犂牛（まだらうし）の尾の毛は馬の尾よりも細く、白く、軽く他の毛にない独特の持味を有するので、この毛で僧侶のつかう払子（ほつす）を作り、又、旗、搶、人形、獅子頭などの装飾としたものであつて、武器としても、

武田信玄の兜（遊就館）

大　鳥　毛（島津家）

陣　羽　織（池田宣政家所蔵）

三斉公甲冑さいはい（細川護立家所蔵）

などこの赫熊の毛を用いたものがみられ、古くから輸入されていた事を知る事が出来る。

また歌舞伎劇の（石橋（しやくぎよう））や（連獅子）などの鬘（かつら）もこの毛で作られている。

九州佐賀の浮立（ふりう）面にも赫熊がつかわれた。浮立面の由来は今より四百年前、肥前神崎郡目達原に於て豊後の大友氏と肥前の竜造寺両族が大兵を挙げて戦つた事があつた。その時大友軍の勇敢なる騎兵隊のため竜造寺は将に一敗地にまみれんとした。その時竜造寺氏の客分であつた鍋島の豪族鍋島平右衛門が、自分の一族郎党に、みな黒く塗つた鬼の面に赫熊の毛を冠せて、陣鉦、陣太鼓の音に合せてときの声と共に一気に敵の勝ち誇つた騎兵隊の中に突入した所、騎兵隊の馬が、この異様な鬼の面に驚き浮き足たつたその機を逸せず竜造寺軍は勢を盛り返して其時の合戦に大勝利を占めたのである。その勝戦の祝宴の時、鍋島方は一様に鬼の面を冠り笛、鉦、陣太鼓の音に合せて踊り抜いたのでこれが浮立面の起因であり、此の地方の年中行事となつているのである。

これは、九州人、特に武の国、葉隠の佐賀人的勇壮な郷土民芸である。

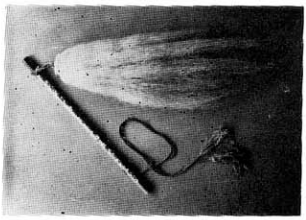
この支那の犂牛というのは「ヤク」のことである。ヒマラヤ・チベットの高原地帯に野生もし、家畜として牛

赤の振毛と払子

赫　熊

兎の手

面浮立―佐賀県の郷土芸能



采　配

能古見人形・浮立面

の代りに用いられてもいる動物である、牛の一種であるが、全身に長毛が生え、尾にも全体に長毛があり、角が長く上の方にのびている。毛の色は野生種は黒色であるが、家畜のものは、黒、白、茶、斑などいろいろあり、現物が多摩動物公園に飼育されている。

今はこの毛の入手が困難なので仏家の払子も馬毛で作られたものもある。

横道へそれましたが、今日でも最もさかんに白粉刷毛を使うのは歌舞伎俳優のようである。歌舞伎劇出現の年代は慶長の前後（約三百四十年前）出雲の阿国の創始した念仏踊りに端を発す。お国は出雲大社の巫女であつて、本殿修繕の勧進に巡回したという事から、神楽舞から始まつたものと考えられており、始めは阿国歌舞伎、又は、女歌舞伎として行われ、風紀上の理由から寛永六年十月、一切之を禁止されるに及んで、若衆歌舞伎として行われたが彼等も男色を以て客を迷わすに至つたので、承応元年、これら少年の前髪を切らせ野郎歌舞伎として復興され、以来、江戸時代の最も有力にして複雑な舞台芸術として発達したもので、最初の完成は元禄期であり、宝歴以後に至つては人形劇の要素をも摂取し、先行並行の各種演劇芸術の集大成として完成されたと演劇博物館に伝えられている。

歌舞伎の始まりは女が男の役をつとめるものから、男女混合のものとなり、寛永十七年には更に女優を禁じた。歌舞伎も女が出なくなつては芝居にならない。そこで幕府に懇願して役者の肩書へ男方、女まね方を標記する事にして、わづかに女形をゆるされた。これが後世の立役、女形のはじまりをなしたといわれる。女形の元祖として名高かつたのは、慶安元年のころ京都より江戸に来た、右近源左衛門であるといわれる。

源左衛門芸をするとき、いまのかつらなどかぶるものなし、うこんのふくさ物に、ほそき糸をつけて、額に

かぶり、そのふくさ物を、ひたひに打かぶるによりて、このふくさにて月代をかくす、面体きれいの若ものなれば、女のごとくみゆる、

とある。京都での女形の始祖は糸縷権三郎であるという。

その後俳優の女形への精進によつて女形としての芸術を築き、妖艶な美しさは女優よりも女らしいという幾多の名優が伝えられているが、女形への精進にはなみなみならぬものがあつたであろう。

昔の名優といわれた女形は、小屋へ入つても、舞台へたつまでは、あいての立役と顔をあわせないようにしたという、それは色気がさめては、舞台で情がうつらないからで、名女形、二代目瀬川菊之丞は

面影のかわら撫子秋更けて
我起ふしを人に知らすな

と詠じている。

次の幕で自分をいぢめ詞む立役と向ひあつて、あぐらをかいて、食事するなどはよくない

楽屋ではふんどししめるお姫様
楽屋では御台所も茶腕酒

これでは本番の実感が出ないであろう。諸事楚々として、食事なども人の見ぬ方を向いて行ない

疝気をも癪にしておく女形

というように女役という心がけを忘れぬため、わが家でも常に針仕事や、女の技芸をしていたといわれるが、なかでも有名な四代目岩井半四郎は、寛政時代の事であるが、銭湯にゆくのさえ、女湯に入り、立膝して糠袋

をつかい、その容姿は、どちらからみても男とは思われなかつたという。

元禄時代には近松門左衛門の活躍により歌舞伎芸術としての地位を築くと共に、女形の完成した時といわれ、初代坂田藤十郎、初代芳沢あやめ、水木辰之助、瀬川菊之丞、岩井半四郎などがあり、そのほか山下京右衛門、上村吉弥、玉川千之丞など後世まで聞えているが、当時江戸の劇団に荒事の元祖市川団十郎を出し、これらが創始した一流の芸は今も伝えられ繰返し上演されている。

歌舞伎は広く庶民の人気を呼び、あらゆる階級の人々に支持を得たが、武士階級には人気がなかつたようであるが、これは正徳四年に大奥の月光院付女中年寄の絵島が歌舞伎俳優生島新五郎を愛し、絵島生島事件を起したがため幕府はそれ以後、武士階級と歌舞伎との離間政策を強めたためといわれている。

歌舞伎俳優も、ある時代には河原者などと蔑(さげす)まれた事もあるが、後には天皇の前でその技を演じた事もある。それは明治二十年四月、麻布鳥居坂の井上馨邸の八窓亭の落成祝に際し、明治天皇が、翌日は皇后陛下、その翌日は皇太后の天覧をかたじけなうした。その時の狂言は、第一、勧進帖、第二、北条館田楽舞（高時天狗舞）第三、操(あやつり)三番叟、第四、漁師月見、第五、元禄踊、第六、孝源氏陸奥日記（伊勢三郎）第七、菅原寺小屋、第八土蜘、第九、徳政の花見であつて、これを日によつて適宜に配合演出したのである。

文政八年七月（約百三十年前）に四世鶴屋南北作（東海道四谷怪談）を三代目尾上菊五郎が初演しているが、この絵は（砂村隠亡堀の場）のお岩の早代りで、牡丹刷毛を使つて顔のこしらえをしているところであるが、もうこの時分には白粉刷毛は一般婦女子が用いたのでかなり進歩していたと考へられ、五世尾上菊五郎が市村家橘時代（元治元年八月）新調して使用していた化粧道具を、後に養子尾上梅幸（先代）に譲られたが、梅幸の弟子

尾上梅三郎が梅朝と改名の時、記念に贈られた中にある白粉刷毛（演劇博物館蔵）を見るに実に良く作られている。現今のものもそれより進歩していると思われない程である。

白粉刷毛の生産の最も盛んであつたのは明治時代であつて（パフ）が出来てから後は次第に減産されて来て、ことに現今では白粉の質が違つて来ているので（ドウラン化粧）でもせぬ限り、一般婦人は刷毛を使わぬようである。

婦人の化粧法も時代時代の民衆の好みに合わせて変遷していくものであつて、江戸時代になると、錦絵などの影響もあつて、男性が理想とした若い女性の顔は、頬はふつくら富士額、色あくまで白く、眉は遠山の霞の上にぽつとかすむ弓張月、目はぱつちりとやや切れ長で、鼻筋とおつて、おちよぼ口、髪は烏の濡れ羽色といつたところ、化粧法もそれを規準にしてつくりあげてゆく。水おしろいも後にはできたが、白粉は固形であつたので白粉ときにいれてとかし刷毛で塗る。鼻筋をきわだたせるために、鼻それに頸筋にも濃く塗る。それから顔にかかるが、この時こそ白粉刷毛は極めて重要な、大きな役割を果すわけで川柳子も

牡丹刷毛だんだん顔になつてくる

と失礼なうちにも白粉刷毛の威力を吟んでいる。

昼寝から覚めて芸者屋化け始め

これはまた化粧の表現が乱暴なようであるが、化けるも化粧も同様の意義であろうか。

芸者は「きれいどころ」などと表現され、宴席にはべり、あでやかに情緒をただよわせ、酔客を恍惚たらしめるのであるが、ひる寝からさめた彼女たちを、もともときれいではあろうが、さらに見ちがえるような「美妓

連」につくりあげるために白粉刷毛は蔭で人知れず奮励努力しているのである。

白粉刷毛は今でも俳優の化粧にはなくてはならぬものであるが、その種類と量は俳優の階級の上下、役柄、立役と女形とによつていろいろであるが、下級役者は各種一つづつでも間に合せるが、立役ことに女形の立場になると数も多く使用するので、立役どころで大体の標準は、

牡丹刷毛（大二）（小一）

水刷毛（二）

板刷毛（三）

ほほ刷毛（一）

というのが最低でこれより多い事があつても少なくはないわけ。以上は歌舞伎俳優についての事で、その他、新派、新国劇なども同様であろうといわれている。

白粉刷毛は俳優が楽屋で使うのであるが、舞台で刷毛を使う場合もある。歌舞伎劇の狂言では

与話情浮名横櫛（よわなさけうきなのよこぐし）

多左衞門妾宅の場

おとみの化粧刷毛（初演嘉永六年）

（尾上松緑丈調）

がある。

観光地として名高い神奈川県の鎌倉に（化粧坂）がある。

鎌倉は寿永四年三月、平家一門を長門の壇の浦にほろぼした源頼朝がここに幕府をひらいた事は人の知るところ。その源氏も頼朝が幕府をひらいてより三十四年にして源家の正統は絶えたが、鎌倉幕府執権北条氏がその実権をにぎり、北条高時のほろびるまで百十四年。さらに足利、上杉がこの地によつて関東を支配する事百年余、あわせて二百五十年間、鎌倉文化は栄えた。今はおとづれる人もない苔むした数々の遺跡が、いにしえの名残をとどめ、その風物は武士興亡流転の古い歴史にいろどられている。

その扇ケ谷の横手の小道、悪七兵衛平景清の牢跡のそばに化粧坂がある。昔、攻め亡ぼした平家の武将達の首を、ここで化粧して首実検にそなえたことからこの名がおこつたといい、また曾我物語の曾我五郎のなじんだという遊女がここに住んでいたためともいう。そしてこの化粧坂は元弘三年五月新田義貞が鎌倉を攻めた時の古戦場でもある。

文身（いれずみ）に白粉彫りというのがあつて、肌に彫つてあつても、平素はほとんど見えないが飲酒や入浴で、肌が赤く色づくと、その部分だけ白く紋様を見せる。あまり自慢にならぬかもしれぬが、世界にも類例のないものが、わが国にある。

これは白粉に鳥のトサカの血を交ぜて彫るものとか。

ある富豪にかこわれていた妾（めかけ）が、ほかの愛人の名を二の腕に白粉彫りにして、ながい間少しも知られずにいたが、紅葉（もみじ）色づく頃、旦那に箱根へ連れてゆかれた。何がさて久しぶりの温泉旅行に気もそぞろ、旅館にくつろいで、すすめられるままに飲むほどに酔う程にあまりの嬉しさにすつかり有頂点になり、いれずみの事などすつかり忘れてしまい、旦那と共にはいつた家族風呂で、くつきりと現われた白粉ぼりの男の名を旦那に見つけられ、

草むらにすだく虫の声も弱々しくなつた秋の末、とうとうお払い箱になつたという。

白粉刷毛の種類としては

牡丹刷毛

水刷毛

板刷毛

ほほ刷毛

と分れており、その大きさも各々数種類あるのであるが、眉墨刷毛、マニキュア筆なども白粉刷毛と共に化粧刷毛として包含されるものであろう。

化粧刷毛に用ゆる毛質は白い毛がだいたい羊毛であり、栗茶色、或は黒い毛等は馬の胴毛で作られるが、また鹿毛、或は狸の毛や白い豚毛などを使う場合もある。